

すみだの地場産業「メリヤス」



株式会社小倉メリヤス製造所 栃木工場

■「莫大小」と書いて何と読むか

「莫」という字は「く」ではない」という否定の字で、「大きくも小さくもない」という伸び縮みする生地である事から、この「ばくだいしょう」と書いて『メリヤス』と読みます。諸説ありますが、「靴下」を意味するポルトガル語の「メイアシメias」やスペイン語の「メディアスmedias」から転訛して「メリヤス」になったとされています。メリヤスとは、伸び縮みする編み物の布の名称です。従来メリヤスは、肌着や下着などを指して使われていましたが、セーターをはじめ、編み物でできた生地を使用している物をメリヤスと言うようになりました。

■日本に伝来した最初の

メリヤス製品は「靴下」

南蛮貿易(16世紀中頃〜17世紀中頃)でスペインの商人が靴下を持ち込みましたが、実際に履けたのは大名だけとされていて、庶民が靴下の存在を知ったのはもっと後の時代です。

日本最古のメリヤス製品として、江戸時代の水戸光圀公が履いた靴下が現在も残っています。海外製の手編み靴下で、日本にメリヤスが無い時代、海外では既に柄付きの手編み靴下が存在していました。



水戸光圀公の靴下(複製品)
(左:部分アップ 右:全体像)
出典:株式会社ナイガイ

■墨田区はメリヤス

ニットの一大産地

江戸時代、墨田区の南半分を範囲とする「本所地域」は、世界最大の人口を抱える江戸の繁華街でした。全国の下屋敷が立ち

並び、また幅広い職種の人が同じ地に家を構え、武家から商人まで多くの人が集まった職住一体の町でした。その中でも下級武士達が多く、内職として、靴下、襦袢、股引、刀のつか袋や鉄砲を扱う時の手袋を手編みで作っていました。明治時代、廃藩置県により武士達が従来の職を失うと、手編みの経験を活かして続々とメリヤス業に転向していききました。下屋敷をメリヤス工場にしていた事から、墨田区がメリヤス製品の生産地として発展していったとされています。そのため、メリヤス業界は墨田区でも南側に多く集まっています。

■持続可能な社会を目指して

ファッション製品の国内自給率(Made in Japan 製品)は1990年には約50%あったところ、2018年には2.3%にまで減少しています。アパレル市場の価格競争によりコストを下げ、大量生産する為に、海外生産へシフトチェンジしていった事が原因の一つとしてあります。それにより「大量生産・大量消費・大量廃棄」が問題となり、ファッション産業は世

界の温室効果ガス排出量の約10%を占めています。意外にも水消費量は世界で2番目に多い業界であり、世界の排水量の約20%を占めると試算されています。また、動物性素材をとる為に動物たちが劣悪な環境で飼育されたり殺されたりもしています。そのように環境に悪影響を及ぼす業界になっており、また海外で安い労働力を確保するために過酷な労働をさせたりと人権の問題も多く、持続可能な社会の構築の為、今必死にサステイナブルな方向へ舵を切り始めています。

弊社も縫製工場からの発信として、子ども達向けにSDGs(持続可能な開発目標)について考えて形にするワークショップや、SNSでの発信に力を入れて、子どもも大人も一緒に地球環境に対して考えるきっかけになればと活動をしています。

(株式会社小倉メリヤス製造所)

小倉 愛依



ワークショップでの作品

墨田区の遺跡

土にねむる関東大震災の痕跡

近年、墨田区では再開発により、多くの遺跡が発見されており、その数は、現時点で80箇所以上にのぼります。遺跡のほとんどは近世の武家屋敷地跡や町人地跡、寺社地跡で、本所地域に集中しています。また、近世遺跡の上層から関東大震災や戦災に関連する遺跡が遺存している場合があります。このような遺跡を調査することで、文献史料とは異なる視点から墨田区の歴史を明らかにすることが出来ます。今回は、震災の痕跡が確認された遺跡を紹介します。

墨田区No.79遺跡は、横網二丁目に位置しており、令和2年（2020）10月に本発掘調査が行われました。

遺跡の南側には、都立横網町公園が隣接しています。横網町公園は、近世には幕府の御米蔵があり、近代に入り陸軍被服廠が設置されましたが、被服廠移転後の大正12年（1923）9月1日午前11時58分に発生した関東大震災の避難者約4万人が震災後に発生した火災旋風により犠牲になった場所です。

遺跡の概要を見ていくと、近世では南本所石原町の一角に位置していたと推定され、現地表面から1.0m以上の深さから町人地に伴う土蔵や建物の基礎の他、下水溝などの遺構（写真1）や陶磁器・土器、瓦、木製品、銭貨などの遺物が出土しています。出土遺物の年代観から、17世

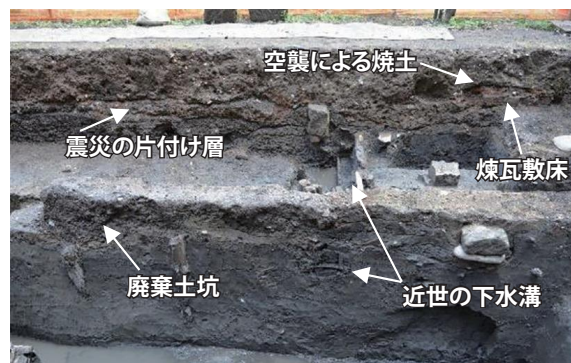


写真1 近世から近現代にかけての層序

紀後半～18世紀初頭に土地利用が始まったと推定されます。

この町人地跡の真上、現在の地表面から0.5m以上の深さから、震災に伴う厚さ20～30cm程の焼土及び炭化層がほぼ水平に堆積していました（写真1）。これは、震災の後片付けに伴う整地層と考えられます。また、その真下から土坑（人為的に掘られた穴）が検出されており、明治時代に入ると流行する染付の型紙摺による文様を施した磁器碗類や皿類の他、蓋・燗德利・火鉢、陶器皿・挿鉢・急須・レンゲ・甕、土器皿、瓦、スプーンなどの金属製品といったさまざまな遺物が出土しています（写真2・3）。この中には被熱した遺物が含まれていることから、震災の際に火災にあった陶磁器などを土坑に廃

棄したものと考えられます。

さらに、震災層の上層から煉瓦敷の床面が検出されており、この真上に空襲による焼土層が水平に堆積していることから（写真1）、何かしらの煉瓦造りの建物が存在していたものと推定されます。

このように本遺跡は、近世から近現代にかけての複合遺跡で、さまざまな遺構・遺物が発見されましたが、特に注目できるものとして、震災関連の焼土・炭化層や廃棄土坑、及び土坑から出土した遺物が挙げられます。

多くの犠牲者を出した横網町公園に隣接している本遺跡の調査成果から、公園の被害状況をより具体的に推測できる可能性があります。例えば



写真2 廃棄土坑出土遺物(被熱したもの)



写真3 廃棄土坑出土遺物

ば、焼土・炭化層や廃棄土坑出土の被熱した陶磁器類を分析することで、震災の際の火災の状況を解明できる可能性があります。さらに、本遺跡以外でも震災に関連する遺跡が発見されていることから、これらについても同様に分析を行うことで、墨田区内での震災の被害状況をより広域に把握することができると考えます。今後は、発掘調査の整理作業を行い、遺跡の分析を通じて、震災以外にも近世の町人地の土地利用や人々の生活の様相の他、震災の状況などについて解明を目指します。

（墨田区文化財保護指導員

田口 哲也）